検証 相模原殺傷事件 識者に聞く ❶

能力主義に偏らぬ社会を

東大先端科学技術研究センター准教授
熊谷晋一郎さん

相模原の障害者施設殺傷事件は26日で発生から半年となった。障害者を標的にした凶行が、「共生」を掲げる社会に与えた衝撃は大きい。事件は私たちに何を問い掛けるのか。私たちは事件から何を学ぶべきなのか。有識者にさまざまな観点から聞いた。

◇　◇

相模原の事件の後、車いすで移動しながら、道行く人にひるむ感覚があった。数日たって「襲われるのではないか」と感じている自分に気付いた。生活基盤が脅かされているように思えた。幼少時の脳性まひのリハビリの記憶のふたが開いた。

馬乗りになった大人との間に感じた圧倒的な力の差。うまくいかないと相手の指先からいら立ちが伝わる。ねじ伏せられる感覚。愛情あるセラピストが友人を踏みつけているのに何もできない。怒りや恐怖…。それ以上に無力感があった。

事件の後、内臓が下に落ちていくような体の感覚もあったが、それは幼少時のリハビリ空間に近づいているのだと思った。事件で被害に遭った方々に自分を重ねていた。

一方、その後の社会の動きにも怖さがある。行政は、本人ではなく家族や施設関係者への聞き取りを根拠に、事件現場と同じ場所に施設を再建する方針を固めた。この発想は容疑者が抱いたとされる「かわいそうなので殺してあげる」という論理と似てしまっている。障害者の立場を勝手に代弁しているのだ。

かわいそうかどうかを含め、自分のことは自分で決める。家族にも社会にも代弁されたくない。1970年代以降の障害者運動はその思いを大切に運んできたのに、事件によって時間を巻き戻されたように感じる。

すべてを容疑者のせいにして、事件が解決したふうを装ってはならない。動機とされる「障害者を排除する」という優生思想は、有用性を基準とする能力主義と分かち難く結び付いている。

現代社会において能力主義と無縁の人はいないし、中間層の大多数は「用無しになる不安」を感じているのではないか。「あいつは使えない」という言葉がよく口にされ、明日には仕事や居場所を失うかもしれない。そうした不安や恐れは、弱い立場の人を排除して強くなった気になる論理にもつながりやすい。

役に立たなければ生きていてはいけないのか―。この問題は、障害者と中間層に実は共通している。「排除の論理」にあらがわなくてはならない。不安を共有し、社会の仕組みを一緒に考えることにつなげたい。

能力主義はなくならないが、同時に、能力に関係なく誰もが生きられる分配の仕組みが必要不可欠だ。

事件の10日後、容疑者に重ねられがちな精神障害や薬物依存症の人も含め、立場を超えた追悼集会を開いた。否定も要約もせず、一人一人の思いを並べ、静かに分かち合う場―。毎年続けられたら、と考えている。

くまがや・しんいちろう　77年、山口県周南市生まれ。新生児仮死の後遺症で脳性まひに。専攻は「当事者研究」。